

MUSASHINOKITA HANDBALL 世界で活躍する卒業生

さまざまな居場所を見つけて活躍している卒業生ですが、近年多くなっているのが、海外に雄飛して仕事をしているOGたちです。ここでは21期生以降の4人を紹介していますが、このほかにもアメリカやホンジュラスなどで力を発揮しているOGもいます。異国の地での苦勞もあるのですが、彼女たちは「むさきた女ハン」で学んだ「努力」と「チームワーク」の大切さを糧に乗り切っている、と口を揃えます。(記事は2019年3月現在)

女ハンで学んだ「努力とチームワークの大切さ」

「途中で諦めない精神」が養われた

ロルフ真梨香さん(旧姓・大坪)
(21期生・アメリカジョージア州在住)



現在の職場での真梨香さん(左端)

21期生は同期が5人という小所帯でしたが、エースの山本佳世さんを擁した強豪チームでした。大坪さんは小柄な右サイドとして速攻と無角度からのループシュートを得意としていました。卒業後、単身アメリカに渡りビジネスの舞台で活躍しています。

「21期のまりかです。私の年はチーム全員入っても7人に足りない時期があって他の部活から助っ人を借りて試合に出ていたのを覚えています。毎回、交替休憩なしのフル試合、キツかった〜！。私は背も低かったし、シュートもそこまで上手なわけじゃなかったのですが、サイドのポジションでひたすら走る&ループシュートの練習を頑張っていました。

高校卒業後はアメリカに留学、大学と大学院に行きました。ミシガン州にある大学でMBAをとったあと、米国公認会計士になり、アメリカの大手監査法人で仕事をしていました。そこからまた日本、タイに住んだりしましたが、今はアメリカに戻り、スタートアップ企業の人事とファイナンスを担当しています。

ハンドをやっていた良かったことは根性がついたこと。人に何を言われようが、負けず

に頑張る根性がつきました。外国に移り住み、社会に出てからも本当に自分の納得いかないことが沢山ありましたが(笑)、打たれ強さと途中で諦めない精神が養われたのはハンドのおかげ！。あとは、背が低くたって、シュートがあんまり上手じゃなかったって、足が速くなくたって、適材適所。

そして自分の努力次第で何かの形で結果が出せることも学べました。コーチに怒られながらも(笑)。

初めて公式の試合でループシュートを決められた時の快感は今でも忘れられません」

「新たな挑戦」に「遅すぎる」はない

大石未来さん(28期生・香港在住)



香港のスタッフに誕生日を祝われる大石さん(中央)

28期生にはグローバルに活躍している方が多いのですが、大石さんは高2のときに1年間スペインに留学。帰国しても、すぐに左腕エースとして復帰、頼れる存在でした。大学卒業後、ユニクロの系列会社GUIに入社。現在、香港店で香港人スタッフの社員研修を、英語で担当しています。得意なスペイン語を使う場面はなくて、残念だそうです。

「你好(ネイハウ)！ 私は2017年6月から香港に駐在しており、今のミッションは教育チー

ムとして香港の人材を育てる事です。香港は狭くて人が多いところというイメージが一般的ですが(人口密度世界3位！日本は25位)、家から30分以内で豊かな大自然にも、大都会にも足を運べるのが良い所だと感じています。

高校時代に女ハンで培った「根性」、「いつでも元気である事」、「チームワーク」は社会に出てからもとっても重要で、香港人はもちろんの事、より多くの世代・立場の人々と接する中で、当時の経験があつて本当に良かったなあと思つてます。

これからの時代、AIや技術が発展していく中で人が出来る事って、人と繋がる事と、何か新しい事を創造する事しかないと思うんです。

そんな未来を生きるであろう高校生の皆さんには、とにかくチームワークや仲間とどうやって上手く目標を達成するかという事、そして自由な発想でなんでもやるという事を沢山経験して欲しいなあと思います。

そうすればきっと、どこにいても生きていける人間になります！。

香港の方々みんな優しく、良くも悪くも適当で(笑)、面倒見の良い人が多く生活に困る事は一切ないです。タクシーの運転手は、行き先を伝えても何も言わずただ発車するの不安になります(笑)。

これからも海外で働ける時間を大切に、日々小さな挑戦を続けたいと思います。It's never late to challenge something new. 香港に来る際はぜひお声かけください！」

女ハンはかけがえのない財産です

井上華子さん(33期生・ブラジル在住)

33期生の井上さんは、左45度のエースポジションを任されていました。「消える魔球」というべきノールックシュートは、相手GKが全く反応できない圧巻のシュートでした。大学在学中にイギリス・ロンドンで「日本語教師」の資格をとり、卒業するやブラジルに渡

互いの考え方を尊重し仲間を大切に

松田ありささん(28期生・スーダン在住)

28期生の松田さんは、小柄なセンタープレーヤーでしたが、フェイントの切れ味が鋭く、ステップシュートも得意でした。大学卒業後は養護教諭として奈良県そして東京都に教員として奉職、いまは、いったん休職し青年海外協力隊の一員としてスーダンに赴き、子どもたちの健康を見守っています。

「私は今、JICAと呼ばれる団体に所属し、アフリカのスーダン共和国で青年海外協力隊として活動をしています。派遣される前は小学校の養護教諭をしていましたが、世界中の子どもたちの健康をもっと良くしていきたいという思いがあつたため、現職参加という制度を使って学校を辞めずに、スーダンの子どもたちへ保健指導をしたり、学校の保健担当の先生たちに研修をしたり、教材研究をしたりして活動をしています。

スーダンへ来た時は、物の扱い方が荒いことや、ゴミが散乱していることに唖然としましたが、反対に挨拶はとても丁寧なところ、

て日系人のための活動に邁進しています。

「こんにちは。33期の井上華子です。私は現在、独立行政法人JICAのボランティアとしてブラジルで活動しています。こちらの小中一貫校でブラジル人と日系人の子どもたちに日本語を教え、また同僚の先生方の日本語教育の質の向上に向けて活動しています。国が桁違いに大きいからか、何をすることも時間がかかりますがその分人々の心も広いような気がします。ネットが入るまで5か月間かかったのは困りましたが(笑)。そんなカルチャーショックを乗り越え今では楽しく過ごしています。

私が現役のころはグランドが工事中で、完成するまで近くの公園に毎回簡易ゴールやボールを運んで練習していました。満足にいけない環境でも仲間と切磋琢磨する毎日の中で得た対応力が、今活きていると思います。また、チームスポーツを経験したことで社会に出る前に大切な価値観の基礎を得られました。



現地での松田さん(前列右端)

自信に満ち溢れているところなど、悪い面も良い面もあつてとても人間らしいなと思いました。まだ言葉の壁があり意思疎通できなくて落ち込むこともあります。スーダンの人たちの陽気なところに元気をもらいながら過ごしています。

高校でのハンドボールでは、先輩や後輩、同年代の色々な個性を持った仲間がいる中で、お互いの思い違いで喧嘩をしたこともありましたが、素直になってよく話すことで誤解も解け、ハンドボールがより楽しくなった思い出があります。それぞれの考え方を尊重して折り合いをつけていくことが今の活動の中でもとても役に立っています。

今しかない高校生活とハンドボールを思いきり楽しんでください！」



祝うイベントでの井上さん

現役の皆さんはこれから将来に向けて様々な選択をすると思いますが、悩んだときは保護者や仲間に自分の考えをよく話してみてください。徐々に伝えれば応援してくれると思います。女ハンはかけがえのない財産だと思うので、ぜひ大切に、現役生活を満喫してください。卒業生として応援しています」